

社
SHA

楽
RAKU

神奈川県立川崎図書館 が所蔵する
全国有数の〈社史コレクション〉を
さらに活用していただくため、
社史の使い方や、社史の楽しさ、
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.77

2018/10

社史の装丁のクロス(布)に、その土地ならではの織物・染物などが使われていることがあります。地域と結びつきの深い地方銀行の社史で、そうしたものを何冊か見かけたので、今回の「社楽」で紹介しします。

● 『鹿児島銀行百年史』(1980年刊)の「凡例」には「装丁は鹿児島県特産の大島紬を使用した。」とあります。大島紬(おおしまつむぎ)は鹿児島県・奄美大島の伝統的な絹織物で、高級な着物などに用いられています。

熊本県の『肥後銀行五十年史』(1977年刊)の「凡例」には「装丁には、熊本県特産の肥後緋の生地を使用した。」とあります。肥後緋(ひごがすり)は、縞模様が特徴的な木綿です。

徳島県の『阿波銀行七十年小史』(1967年刊)は、藍色がきれいな、やや小ぶりの社史。「あとがき」から引用すると「表紙には、阿波藍で染めた、阿波緋(あわしじら)を使った。緋の手ざわりに、カラリと晴れた南国阿波の空を想い、さわやかな藍の香りに、阿波銀行の七十年を偲んでも

らえたら、本書に似合しからぬただひとつの奢りも、かならずしも、意味なしとしなのである」と担当者の想いが記されています。緋とは表面に細かい縮みしわのある織物のことです。

緑色の布を用いた『滋賀銀行二十年史』(1954年刊)の「あとがき」には、「表装に使用した布地は、近江長浜の名産「浜紬」である。」とあります。浜紬(はまつむぎ)は、滋賀県長浜市で織られる絹織物です。

(裏面につづく)

装丁に、大島紬・肥後緋…

(表面から続く)

栃木県の『足利銀行史』(1985年刊)には、目次の最後に「表紙クロス／足利織物・正絹紬地 前扉／烏山和紙・雲龍紙」と記されています。本文にも、足利の織物業との関わりが詳しく記されています。

富山県の『北陸銀行十年史』(1954年刊)は、「あとがき」によると「装丁の葛布は倉敷民藝館附属工芸研究所」によるものと書かれています。葛布とは、葛の繊維から作る織物で、富山県との関わりは定かではありません。ただ、「書中の和紙は八尾越中新社」とあり、地元の伝統産品を用いていることは確かです。

山形県の『両羽銀行六十年史』(1956年刊)の「あとがき」には「使用した布地は、織物産地本県米沢市の輸出織物(ファエル)メーカーとして知られる湯野川工業有限会社の製品であり、見返し、前扉に使用した和紙は、本県上市市高松に於て古来から生産されるもので、特に極薄和紙は「高松の麻布紙」と称し有名な特産品である。」と記載されています。

その両羽銀行が改称した『山形銀行七十年小史』(1966年刊)でも「六十年史と統

一すべく前著に倣い、本県米沢市の輸出織物メーカーとして知られる湯野川工業有限会社の製品を用いた。」とあります。

地方銀行に限らず、例えば『愛媛新聞八十年史』(1956年刊)は「伊予緋」を用いています。また近刊では、富士急行の『この40年のあゆみ』(2017年刊)には「富士山麓の湧水で清められた糸が織り成す優美な色合いと独特の風合いを持つ、山梨県富士吉田市の伝統織物「ふじやま織」を使用しています。」(奥付のページ)とあります。

いずれも、地域と関わりの深い企業ですね。

こうした社史は、手にとると、土地の歴史や温かみを感じます。

装丁については、たいていの場合、目次の前後や、あとがきなどに記載がありますが、何の記載もなく、特徴的な布地なのに特定できないことも多々ありました。

社史の装丁と地域の特産物というのも面白い切り口だと思います。当館の社史で探してみたいかがでしよう。

(企画情報課 高田)



当館ホームページにて「すごい社史」を公開中

特色ある社史を写真付きでご紹介。随時、更新を行っています。

http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/sugo_shashi/index.htm

●お問い合わせ先 神奈川県立川崎図書館 企画情報課

213-0012 川崎市高津区坂戸3-2-1 かながわサイエンスパーク 西棟2F

電話：044-299-7826 FAX：044-322-8878

<http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>